

BLUE SOCKS 2020

## 特集

誰もが日本一を目指した！ブルーソックスの原点、発足当時のイズムを21年前に決行したカナダ遠征から色褪せない今を振り返る。

BATTLE in CANADA より 1998.10

## カナダ遠征



BLUE SOCKS

1998  
主将

伊藤 浩二

私は中学、高校とラグビーをやってきました。高校時代はラグビーの名門日川高校でラグビーをし、毎日毎日、厳しい練習をしてきました。それは全国制覇という大きな目標があったからこそ、厳しい練習にも耐えてこられたのだと思います。しかし、何度も辞めたいと思ったことがありました。でも、ここでやめたら一生後悔するだろうと思い、仲間とともに3年間がんばりました。私たちが3年の時は、全国ベスト8で敗れ、結局夢は叶いませんでした。しかし、全力で挑んだ末の結果です。悔いが残らなかったと自信を持って言えます。そして、大学進学。完全燃焼の反動が大学ではラグビーをしないつもりだったのです。しかし、1年の終わり頃、高校時代、日川高校で共に頑張った親友の深山（ブルーソックス不動のフッカーがクラブチームでプレイしていると聞いたとき、自分の中に隠れていたエネルギーが再燃しました。そして、練習初日。私は「クラブチーム」だからという心構えが多少あったのですがそれは間違いでした。ブルーソックスのみんなは真剣でした。日本一という目標に向かって。日川高校、いやそれ以上に。私は高校時代に全国制覇という忘れ物しています。このブルーソックスのメンバーと一緒に取り返したいです！そして日本一になりたいです！私は夢を追いつづければ必ず日本一になれる、そう信じています。だから、これからもブルーソックスでがんばっていきたいと思います。



2020年9月某日。亀龍監督が突然懐かしいあるものを部員に見せるために持参してくれた・・・。

それは、1998年の10月に敢行したカナダ遠征の盾であった。ブルーソックスが発足した当時から在籍している私には、それを見た瞬間21年前の熱いチームの記憶が蘇った。果たして亀龍監督は何を想い、部員にそれを見せたのだろうか？全てはこの記事の中にあつた。それは当時カナダ遠征に同行してもらった雑誌の編集長・中島氏が、我々のチームのイズムに共感し、カナダ遠征に同行してもらい実際の記事として掲載した「ラグビーワールド」の掲載記事に全てが掲載されていた。

ラグビーワールド 1998 WINTER号より

※全てを掲載するには文章量が多いので隔週で3回に分けて当ホームページより掲載します。

少誌ではクラブラグビーの進化・ステータスの向上を目的とし、これまで数多くのページを割いて全国のクラブチームを紹介してきました。なぜなら日本ラグビー（世界を見るとさらに顕著だが）の競技者の大半はラグーマンだからです。日本のラグビーが発展するには、このクラブラグビーの発展が不可欠であるとは言ってもいいのです。

少誌が月間で発刊していた時点では、毎月、約60チーム、ページ数にして30ページを超えるスペースで、主役である全国クラブラグーマンのご意見を紹介して参りました。しかしながら、なかなかクラブラグビーのステータス向上のための意見も聞かれず、誤解を恐れずに「内輪受け」が先行し、もともとの趣旨から脱線してしまいました。クラブラグビーは楽しくがモットーであるのだし、各クラブチームごとの方針があるのだからほっといてくれ、といった意見もあるかもしれませんが。実際にそのようなご意見をいただいたこともあります。

しかし、逆に一流と言われている大学の選手や企業の選手の声はというと、クラブラグビーは遊び、クラブラグビーは老人ホーム、はっきりってクラブチーム情報のページは要らないといった声があちこちから聞こえてきました。

もちろんそういった声ばかりではありませんが、ラグビーを愛し、日本のラグビーの発展を願う者としては、双方の温度差は絶対なくさなくてははいけないと感じています。なぜなら、それが私の使命であると考えからです。

さらに言えば、私だけではなく全国のクラブラグーマンが現状に満足しているようであれば、一向に日本のクラブラグビーの発展は難しいでしょう。クラブラグビーの皆さん、この文を一読していただいたならば、皆さんのご意見、夢、そしてパワーは私の方に向けてください。絶対に！必ず！心の底に眠っているエネルギーが生まれてくるはずですよ。そうでなければクラブラグビー、ひいては日本のラグビーに未来がありません。

今、日本代表は日に日に成長し、そして来年はワールドカップ本大会に挑もうとしています。クラブラグビーも負けてはいられません。幼稚な言い方かもしれませんが、ラグーマンは世界のどこに行っても同じ人間なのです。やって出来ない事はありません。私も少し熱くなってしまいましたが、実際の主役である皆さんならばもっともって熱くなってしかるべきです。

それでは光明を見出すべく明るいお話を。このような状況下、以前から一貫してクラブラグビー発展のために全精力を注いできてくれたチームがいくつかあります。そのうちの1つが埼玉県ブルーソックスです。彼らは、はっきりってやばい位熱いチームです（夜間練習は、車を並べヘッドライトを頼りに河川敷で行っているため、パトカーに注意されていることもしばしば・・・）。

本気で日本一を目指している彼らは、現在、埼玉県2位の實力を要するのですが、さらに上を目指し、そしてクラブラグビーの先駆者になれる世界の最先端を体験しに、去る9月、カナダ遠征を敢行してきました。私もその話をお伺いし、クラブラグビーの発展を願う1人として、これは何らかのヒントになると考え、迷惑覚悟でカナダ遠征に同行させてもらいました。まずはそのレポートから紹介していきたいと思つています。

## ブルーソックス、その原点

「君たちは何のためにまたラグビーを始めるんだい？」

10年前、ブルーソックスは、亀龍俊一、亀龍信二、八巻哲男、工藤悦成、大島茂夫の新座北高校ラグビー部OBを中心に結成された。その最初のミーティングでの出来事、その場にはたまたま居合わせた亀龍憲司氏（現監督）の冒頭の問いかけで全てが始まった。憲司氏は矢継早に「貴重な人生を使う目的をしっかりと持ちなさい。例えば日本一」そう付け加えた。

「日本一」。お世辞にも一流とは言えないチームでラグビーをやっていた彼らにとって、その言葉はあまりにも強烈で、違和感があった。

「無理ですよ・・・」。そんな言葉が出そうになった時、「君たちはこれまでか与えられた環境に甘んじてきたが、自分たちの本当の可能性を知らずに生きてきたんじゃないのか？自分を信じてラグビにかけてみたらどうだい！」

信じよう！やってみよう！

しかし創設初年度の大会で、県内70チーム中最下位。いつか日本一になると意気込んでも、誰もが笑って相手を相手にしてくれない。

必死で頑張っていると、弱いくせに、高校生みたい、と後ろ指をさされた。そんな中、約40名いたメンバーの半数以上が辞めていった。すっかりその気になっていた先駆者達との間にギャップが生じたのである。

「これでいいのか？」

と何度も自分に自問自答した。しかし、初志を貫いていくうちに「一緒に夢を叶えよう」と言うメンバーが次第に集まり始め、噂が噂を呼んで、「うちも負けずに頑張るよ」「実は応援しているんだ」などの声が聞こえるようになった

夢はさらに膨らみ、次第に夢が現実へと近づいていく。

そして、9月、カナダ遠征が刊行された。

フルバック木戸のライン参加から、ウィング小林へつなぐ。勝利の方程式も完成。

死んでも離さない！。どれだけ刺さろうとも、バミューダレネゲイツはボールをつないだ。



ブルーソックス、ファイト！の掛け声でスイッチはオフからオンへ。

現地で合流したフランカー岡崎は、地元の大学へ留学中。自称世界最強のフランカーだ。



1999年発行書籍「ラグビーワールド」



「ラグビーワールド」編集長 中島聖司



チーム創設時からのメンバー（後列左から、工藤、亀龍信二、大島、八巻、亀龍俊一、亀龍憲司監督）。